# 全方向彼女

閑カナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
全方向彼女

【Ｎコード】
Ｎ３７９９Ｑ

【作者名】
閑カナ

【あらすじ】
ぼくは彼女がすき。――奇遇だな！おれもあいつがすきだ！俺もすき！おれも。私も――小学生からロマンスグレーまで、対象年齢全年齢に及ぶもてっぷりの、枚島有花（まいしまゆか）にまつわる七つのお話。＊のんびりペースの更新になります。

## ローティーン））片桐一樹の一

茶色がかったボブヘア、大きな瞳、細い指、白い足。
ぼくと好きな人とは、ちょうど１０歳、年が離れてる。

学年で一番頭のいい斉木駿（さえきしゅん）の、一番の友達がぼく、片桐一樹（かたぎりかずき）だ。テストで９０点以下なんかとったことがない駿だけど、全然ガリ勉じゃないし、放課後はいつもぼくらとサッカーをしている。ぼくは７０点以上とったことがないバカだけど、サッカーは誰よりも上手い。背は駿の方が高いけど、顔はぼくの方がかっこいい。ほとんど反対のぼくたちだけど、だから親友なんだって兄ちゃんが言ってた。ぼくも、そうだと思う。

駿とぼくは幼稚園からずっと一緒だった。でもこの先は違うんだって気付いたのは小学五年生になったとき。つまり、今日だ。
賢い駿は、バカなぼくには行けない、賢い中学校へ入るのだ。

「じゃあもうサッカー出来ないのかよ」
「多分ね。それがマジ、最悪」
「駿いなかったらキーパーどうすんだよ。和田とかマジでイヤだからな」
「和田とかおれもやだって。でも他にいないんじゃないの」
「ああ、マジで最悪だ…」

ぼくと駿は、夕方の赤くなった道を一緒に帰る。駿がぼくんちの二軒先に住んでるからだ。でも一緒に帰るのも今日が最後になった。明日から、駿が塾に通うことになったから。

家についても、ぼくはずっと駿のことを考えてた。小学生になっ

たときはクラスが離れたけど、三年生になってからはずっと同じクラスだった。でも二年後、中学生になったら、駿は電車で通う学校へ行く。ぼくは、自転車をこいで中学校へ行く。

（だっせえ）

駿は、大人みたいに、大人と一緒に通勤電車に乗るのに、ぼくは自転車で、しかもヘルメット通学なのだ。

なんだかすごく、置いていかれた気がした。

晩ごはんは餃子だった。父ちゃんはまだ帰ってきてないから、兄ちゃんとお母さんと三人で食べる。兄ちゃんも駿のお姉ちゃんと同い年で、仲がいい。だからだと思うけど、駿の塾のことを知っていた。

「それでさみしいんだろ、お前。駿はひとりで賢い学校行くのに、お前は代わり映えしない仲間と近所の中学だもんな。駿に置いてかれちゃうなー」

「うるさい」

自分だって駿の賢いお姉ちゃんに置いてかれたくせに。

「あら、じゃあ駿くんも八弥真へ入れるつもりなのね…。さすがねー斉木さん」

八弥真は駿のお姉ちゃんが行ってる中学校だ。多分、そうなんだろう。

「うらやましいわあ、あそこの子たちみんな賢くて。ねえ、一樹…あんたも駿くんについてって塾通いなさいよ」

「んぐっ…。はぁ？なんで！」

「お母さん、あんたが１００点とるところ一回でいいから見たいわ…。そうね、ちょうどいいじゃない。あんたも塾行きなさい」「待

ってよ！やだ！ぼくサッカーあるもん！」
「一樹。…上手く時間を使ってこそ大人よ。がんばって両立しなさい」

無茶な！

駿と離れるのはイヤだけど、塾はもっとイヤだ！勉強したってどうせ駿と同じ学校になんか行けないんだし。
ニヤニヤしてる兄ちゃんに無性に腹が立って、ケンカをふっかけたけど軽くかわされ、お母さんに止められる。

「さっそく斉木さんとこに電話してどこの塾か聞いてみようかしら。あんまり高いとこだと困るわねえ」

どうか高いところであってください。そうしたらきっと父ちゃんが反対するから。そういのりながら、ぐっすり寝た。

その次の朝、ぼくの願いも虚しく、塾へ通うようにと父ちゃんが言った。

「聞いたよ、一樹」
駿はうれしいけど申し訳ないみたいな顔をして言った。ぼくは何度目かわからないため息をつく。

「おれ、勉強したってムダなのに母ちゃんがさあ…」
「ムダじゃないよ。一樹ほんとは頭いいよ。だから、がんばろうぜ。…おれ一樹と同じ中学行きたい」

申し訳ない、みたいな顔をしてたはずなのに、今は駿は真剣な顔をして言った。

離れたくないって、駿も同じ気持ちだったんだ。なんだかとてもうれしくて、でも喜んでいるのを見られるのはかっこ悪い気がして、ぼくは少しうつむいた。

「でも、おれ、サッカーがさあ…」

「辞めろって言われたの？」

「…言われてない」

というか辞めるなと言われた気がする。

「じゃあいいじゃん。一緒に塾行こうぜ」

駿がそこまで言うなら…。

どうするか、もうぼくの中で決まってしまったけど、考えてみると駿に答えて、ぼくは少し早足で学校へ向かった。

その日の放課後は、初めて独りで帰る日だった。駿は学校が終わると塾のためにすぐ帰り、ぼくはサッカーの練習に行ってから帰る。教室で駿が帰るのを見送って、グラウンドに下りようとするぼくを、小さい声が呼びとめた。振り返ると、同じクラスの遠山えりなが立っている。気付けば教室にはぼくたち二人だけ…でも女子が何人か廊下から覗いているのがわかった。なにが起こるのかも、ぼくにはわかった。

そして、思った通り、遠山えりながぼくに告白する。実はぼくは、遠山えりながぼくを好きなことを知っていた。さらに言えば、東沙由美もぼくを好きだし、山田葵羅もぼくのことが好きだ。ぼくは、ぼくがモテることを知っている。

ぼくは今日二回目の考えてみるを言って、逃げるようにグラウンドに下りた。

ぼくは結構モテる。でも告白されたのは初めてだった。

本当なら帰りながら駿に相談できたのに、そうできたのは次の日の朝だった。一緒に登校するために、駿は毎朝ぼくのうちに来るのだ。　遠山えりなのことを話すと、駿はすごく驚いて、いつもの倍の早さでしゃべった。駿は興奮するとすぐ行動にでるのでわかりやすい。

「どうすんの！？付き合うの！？」
「え、わかんない…」
「すごい、いいじゃん！遠山えりなかわいいじゃん！」
「えー…そう…？」
「クラスで一番っておれ思うけど」
ぼくも実はそう思う。
「じゃあ一樹、遠山えりな振るの？」
「えー、おれわかんない…。だって女とか面倒じゃん。サッカーわかんないし」
「ああ、まあな…」

そう言うと駿も少し落ち着いた。
昨日は興奮して寝つけないぐらいうれしかったけど、駿と話していると、やっぱり付き合うのはやめようという気持ちになっていた。女の子と話すのなんて、駿と話すことに比べたら百倍つまらないと気付いたからだ。女なんていらない。もっと、大人になってからでいいんだ。

すごく言いにくいし逃げたかったけど、これまたなぜかぼくから逃げる遠山えりなをなんとか捕まえて、付き合えませんと言った。遠山えりなは泣かなかったけど、やっぱり物陰から女子が覗いているのがわかったから、ぼくはすぐ行こうとした。ぼくがじゃあ、と言ったとき、遠山えりなは、好きな人がいるの、と聞いた。ぼくはいないと答えた。うつむく遠山えりなを後目に、ぼくはできるだけ

早く、でも急いでいるのを気付かれないようにそこを離れた。
そして放課後、ぼくは初めてサッカーを休み、駿と一緒に下校した。塾の一日めなのだ。
駿は、進学コースだからほとんど毎日。ぼくはとりあえず普通コースで、それでも週三日通う。地獄だ。

一旦家に帰って、ランドセルと塾用のかばんを持ち替える。それからお母さんと、ついでに駿も一緒に塾へ向かった。駿は、朝も塾についてはあんまり話さなくて、面倒だとだけ言ってたけど、今も塾に近づくにつれ無口になっていくみたいだった。賢い駿ですらイヤになるところなのに、ぼくなんかやっていけるわけがない。ぼくは授業で当てられたときの一万倍くらい緊張して、吐きそうな気分で、塾に着いたときには心臓が飛び出そうになっていた。 駿は一人で進学コースの教室へ行ってしまう。ぼくは、お母さんと一緒に事務のおばさんに連れられて、三人きりの密室で色々な説明を受けた。

「じゃあ片桐くん、さっそく今から教室行ってみようか。あと１０分くらいで始まるからね」

おばさんのその言葉は、死刑宣告に近かった。

さすがに心配そうにしていたお母さんも帰ってしまい、ぼくはついに独りぼっちになった。コース分けがなければ同じ教室に駿がいたのに――。心臓がもっと早くなった。ぼくはきっと早死にする。転校生ってこんな気持ちなのかな。ぼくの頭はフル回転していたけど、実はなにも考えていられなかった。

「ここよ」

おばさんがドアを開けた。

学校より小さな教室に十五人くらい生徒がいて、一斉にぼくを見た。わかってたけど、知ってる子は誰もいない。女子の方が少し多い。半分は座ってるけど、もう半分は教室の前の方に集まってる。その真ん中に、若い女の人がいた。なんで？誰かのお姉さん？

「片桐一樹くんだね！」

そのお姉さんが言った。

…この人が、先生？

「枚島有花です。よろしくね」

目が合って、びっくりして心臓が飛び跳ねた。

若い女の先生は、にっこり笑ってぼくの肩を叩いた。

肩までの茶色い髪。ぼくより少し高い背。黒いスーツで膝下までのスカートをはいている。靴も黒で、きゅっと絞まった足首を見て、走るのが速いんだな、となぜか思った。笑うと左にだけえくぼができる。きらきらした目を柔らかく細めて、すごくきれいに笑っている。先生はぼくの目線に合わせて、少し腰を屈めた。その目の中に、ぼくが映っているのがわかった。顔がすぐ近くにあったからだ。ぼくは、ぼくが子どもだということが、急に恥ずかしくなった。

「片桐くんは第三小だから、伊織くんが同じ学校だね。このクラスは第三小、伊織くんだけなんだけど、知ってる？」

知らない。首を振ると先生は座っていた男子を見た。あれがイオリか。少し太った、背の高いやくざみたいな顔の子だ。見たことある、気がしないでもない。

「顔は知ってるけど同じクラスになったことない。友達で仲いいやつもいないし」
顔に似合った低い声でイオリは言った。
「そうなんだ…。ね、片桐くん。勉強がんばろうね。わたしは厳しいからね～」
そう言って先生は、またえくぼを作って笑った。
座る席は背の順だと先生は言った。男子で中くらいの高さのぼくの席は後ろから二番目、イオリの斜め前になった。イオリ、ちょっとこわい。ぼくを睨んでる気がする…。
意外だったけど、先生の言った通り、先生は厳しかった。授業中はほとんど笑ったりしないし、次々生徒を当てて答えさせる。でも怒鳴ったりしないし、問いに答えられなくてもバカにしたりしなかった。真剣な表情もきれいだったけど、時々ふっと笑うのを見ると、なぜかわからないけどたまらなく恥ずかしい気持ちになった。
休憩時間、駿に会いに行こうと思ったけど、思い切ってイオリに話しかけてみることにした。だってイオリが、ずっとぼくを見てるのが窓に映って見えてたから。くるりと振り返っても、イオリはぼくを睨んだままだった。
「…何組？」
「一組」
イオリ、無口だ。やっぱり怖い。
「おれ三組。一組って、あの、小林滄来がいるでしょ」
「おう」
「そ、あの、去年おれ同じクラスだったんだ」

「そっか」
「うん」

イオリはまだ睨んでる。ぼくなんかした？知らなかったのまずかった？それでも諦めずに話してみるけど、イオリはぼくと話す気はなさそうだった。そのうち次の授業が始まって、終わるといつの間にかイオリは帰っていた。進学コースはまだ終わらない。外はまだ明るいし、ぼくは一人でうちへ帰った。

それだから、駿と話ができたのはまた次の朝だった。駿はイオリを知っていた。

「目立つじゃん。ちょう怖いし」
「でもおれ知らなかったし、なんにもしてないのに。なんで睨まれたんだろ」
駿がにっと笑った。
「おれわかる」
「えっ。なんで？」
「一樹はモテるからねぇ～」
「はぁ？」
駿はますますにやつく。
「多分さ、そいつの好きな子が一樹のこと好きなんだよ！それで振られちゃったから一樹が憎いんだよ」
「はぁ！？」

ぼくは、思いっきり変な顔をしてやった。どうした駿。お前がそんなこと言い出すなんてなんかおかしいぞ…。それに、

「それおれのせいじゃないじゃん！」
濡衣だ！八つ当たりだ！
「モテる男はつらいね～」

「知らねーよ！」
勉強ばかりで楽しみがないからだ。駿がおかしくなってしまった。ちょっと、うざい。少し力を込めて殴ると、駿はへらっと笑ってごめんごめんと謝った。

「でさ、一樹のクラス、先生若い女の人なんだろ？いいなーおれんとこ、おっさんだよ。しゃべりはおもしろいけど」
「おう、おれもおっさんだと思ってたからびっくりした。でもちょっとこわいよ」
「ふーん。美人？」
「まあ、普通かな」
考える前に嘘をついた。先生は美人だ。…いや、かわいい系かな？だからギリギリ嘘はついてないかも。

先生は、年は知らないけど、多分１８歳。…二十歳かな？とにかくそれくらい。ぼくより十近く年上だ。それでもぼくは先生をかわいいと思う。もう一回、触ってくれたらいいのにと思う。なんか変態みたいだけど。次の塾は三日後だった。ちょっとだけだけど、ぼくは塾を楽しみにしてる。
先生に会いたいと、思ってる。たとえ話せなくても。
でもそのせいで、ちょっと面倒なことになった。

## ローティーン））片桐一樹の二

次の塾の日。イオリは変わらずぼくを睨んでる。その、相手の女の子を恨めばいいのに。ぼくは、他の小学校の子と仲良くなった。先生が２１歳の大学生だと知った。

その次の塾の日。イオリはやっぱりぼくを睨んでる。でも慣れたので気にならない。先生には彼氏がいないと知った。

そのまた次の塾の日。イオリはぼくを睨んでるけど、気にしない。先生は三人兄弟で、年子のお兄さんと弟さんがいると知った。

その日ミニテストでなんと二番になったぼくを、先生が呼びとめた。みんな帰った教室に二人きりだ。遠山えりなを思い出した。ど、どうしよう…？珍しく最後まで残っていたイオリが、今までで一番子ども離れした顔で、浮足だつぼくを睨んで出ていった。

イオリが出ていくと、先生はぼくと机をはさんで向かい合って座った。にっと笑って先生が口を開く。

「片桐くん。片桐くんはそんなに勉強嫌いじゃないでしょ」

「…きらい、だと思うけど」

いや、わかってたよ、勉強の話だって。当たり前。でもなに言い出すんだ、先生。ぼくは勉強はきらいだ。きらいに決まってる。

ぼくが言うと、先生はあのきらきらした顔で笑った。

「最近、学校の授業がわかりやすくなったんじゃない？」

「…ちょっとね」

先生の笑顔はもう、見てられないくらいに広がった。

いつも、先生の話はありえないくらい真剣に聞いてるのだ。ちょっとくらい賢くなったっておかしくないんじゃない、とぼくは思う。
「それはね、片桐くんが考え方をわかってきたからだよ。片桐くん、勉強は嫌いかもしれないけど、ほんとはとっても頭いいってわたし思う」
うう。なんか恥ずかしい。でも駿も似たようなこと言ってたな…。
「片桐くん、進学コースの斉木くんと仲いいって聞いたよ」
先生、駿のことも知ってるのか。
「片桐くんも進学コース行ってみない？斉木くんと同じ中学行けると思うの」

ぼくは先生の目を見たまま、自分がどんな顔をしてるのかわからなかった。

先生が、ぼくは駿と同じくらい賢いと思ってくれてる。そしてそれを喜んでくれてる。でも、進学コースに行ったら先生の授業は受けられない。駿と一緒におっさん先生の授業を聞くのだ。でもそしたら駿と同じ中学校に行けるかもしれない。

「勉強、もっとがんばれるか考えてみて。勉強よりしたいことがあるならそれでいいんだよ。わたしは勉強教えるくらいしかお役には立てないけどね」

へへっと先生は笑った。

勉強はきらいだ。
駿と離れるのはイヤだ。
テストの成績がよかったのは先生のおかげだ。
勉強イヤだ、で終わるはずなのに、胸がもやもやして、ぼくは自

分がなにを考えてるのかもわからなくなった。朝になってもそれは変わらなかった。

思った通りだけど、その話をすると駿は喜んでくれた。

「いいじゃん、すげえじゃん！やった。同じ中学行こうよ！おばさんに言った？」

「んーまだ…」

駿の顔が少し暗くなった。

「…あの、別に無理に誘うわけじゃないけどさ…。八弥真遠いし。私立だしさ」

「私立？」

「うん。あそこサッカー弱いしさ」

私立だからなんだっていうんだ。サッカーはどっちでもいい。ぼくと駿が入れば強くなるから。問題はそんなことじゃないんだって。

一日じゅうもやもやは晴れなくて、帰るとすぐにぼくはお母さんに話した。

「先生が進学コース行ったらどうかって」

お母さんは食器を洗う手を止めて、信じられないくらい目を見開いてぼくを見た。

「まあ。まあ。まあぁ…」

相当ぼくをバカだと思ってたみたいだ。間違ってないと思うけど。

「どうしたらいいと思う？」

お母さんは流しっぱなしだった水を止めた。

「どうしたいの？」

「わからないから聞いてるんだけど」

「どうしてわからないの？もうちょっと勉強がんばるか、がんばらないか、でしょ？」
「そうだけど…」
そうなのかな？そんな簡単な問題なのか？
「お金のことはなんにも心配いらないから。がんばってみたら？あんたあれだけサッカー上手くなったんだもの、勉強だって上手くなるんじゃない？」
「…考える」
すごいわね、一ヶ月も通ってないのに、やればできるってわかってたわよ！とお母さんは言った。

三度目の考えてみる、だ。
それから、駿が私立だからって言ってた意味はわかった。私立はお金がかかるんだ。お金がかかるぶん、ちゃんと勉強していかないとだめなんだ。そしてお金をかけるだけの目的が、ぼくに必要なんだ。たとえばお医者さんになるとか、弁護士になるとか。そんな先のこと、考えたことなかった。
一晩寝て目覚めたとき、結局はぼくががんばれるかどうかなんだって、頭の中でわかっていた。単純な話だ。
それでも、どうしたらいいのかはまだわからないけど。

「おはよう…お母さんは？」
「ママさんバレーの友達と出かけた」

土曜の朝、兄ちゃんだけがリビングにいた。父ちゃんはまだ布団の中だ。

「お前八弥真行くんだって？」
「…まだ決めてない」
お母さんのおしゃべり。

「いやなの？中学受験」
「わかんない。兄ちゃんは今の学校でよかった？」
「まあね。おれは勉強よりバイトがんばりたかったから。八弥真バイト禁止だし通学に時間とられるし」
兄ちゃんは近所の中学校に行って、今年からはうちから一番近い公立高校に通っている。

「なんで？なんでバイトしたかったの？」
兄ちゃんが笑った。
「そりゃ金が欲しかったからだけど。…っていうかさ、早くいっぱしの男になりたかったんだよね。社会の荒波に揉まれてね」
「ふうん…」
「学校で教わることより、人の中で学ぶことを知りたかったの。おれは」

照れたのか、兄ちゃんはすぐにリビングから出て行ってしまった。
兄ちゃんとこんなに話をするのは久しぶりだった。だから、兄ちゃんがこんなこと考えてるのは初めて知った。四つ違うともう頭の中が大人みたいだ。たった四年、ぼくより長生きなだけなのに。

昼ごはんの後でぼくは走りに出た。塾に行ってるぶん体力が落ちてるから、取り戻したい。それに、走ってすっきりもしたかった。塾のコースを変えたって八弥真に行けるとは限らないんだし、なんでこんなに悩んでいるのかわからなかった。勉強するかどうかだけの話のはずなのに。やっぱり頭使うことには向いてないんだって、ぼく。
公園を回って川原を下り、商店街を横切るときに、知った顔を見た。先生だ。
塾じゃないときの先生はすごくだらしない格好だった。大きめのパーカーにホットパンツ、髪は跳ねてるし。笑える。声をかけよう

か迷っているうちに、もうひとつの人影が現れた。

あれ。なんで、なにしてるんだろ。

ぼくと同い年のくせに、先生とほとんど変わらないくらい背が高い。いつもやくざみたいな顔のくせに、今は優しく見えた。笑ってるんだ。

イオリだ。

先生がイオリの頭をくしゃくしゃと撫で、イオリがそれを手で振り払う。イオリが先生の背中をばしっと叩いて、二人で笑い合う。そして先生がイオリと腕を組んで、イオリがそれを外して、二人並んでスーパーへ入って行った。

なん――なんで？

なんで二人が一緒にいるの？仲いいの？先生はあんなだらしない格好だったのに。ぼくはつっ立ったまま、脳みそから覆いがとられたみたいに、色々なことを思い出した。イオリが睨んでたこと。先生が伊織くん、と呼んだこと。伊織は名字じゃない。先生はぼくも教室のみんなも駿も、名字で呼ぶ。

でも、十歳も年が離れてるのに――。今のかんじではそうは見えなかったけど。イオリは背が高いし老け顔だし、二、三歳しか離れてないって言っても…無理はないかもしれない。いやいや違うだろ、なに考えてるんだ。イオリは確かに五年一組にいるんだし。でも、見た目だけなら。先生とイオリは、友達同士とか、…恋人に見えてもおかしくなかった。ぱっと見では塾の生徒と先生には見えない。五年生にしたら、ぼくはチビじゃないけど、それでも小さい、子どもだ。顔も声も、ただのガキだ。

頭がぐるぐるだ。意識してないのに顔が笑ってしまう。イオリは、先生のなんなの？なんにもわかんない。わからない。

でも今、ひとつ、わかった。ぐるぐるの頭が、真っ白になった。

試合のとき、時々感じるあの感覚。頭にスイッチが入って、なにを考えたらいいかだけがはっきり見えてくる。自分の気持ちが、ゆるぎない形で現れた。

ぼくは、ぼくが子どもなのがイヤだ。なにも知らない、なにもできない子どもはイヤだ。ぼくはもう、すぐ大人になってやる。そう思った。決めた。イオリとは違う、兄ちゃんとも違う、ぼくのやり方で。

ぼくは、おれは勉強して一番賢くなる。世の中で一番賢く、一番金持ちで、一番かっこいい男になってやる。

なんだってしてやる。そのためなら。

次の塾の終わり、また二人っきりの教室で、おれは先生に進学コースに行くと答えた。

「そう〜。結局十回も教えられなかったね、片桐くんのこと」

先生は、ちょっと残念そうな顔をしてくれた。おれは答える。

「でも先生のおかげで、勉強するってどういうことかわかったよ」

「そう…。ふふ。ありがとう、すっごくうれしい！」

そう言って先生は笑う。先生の笑う顔をもっと見たいから、おれは勉強することに決めた。知識は年月だと思う。どれだけ多くのことを知っているかは、どれだけ長く生きたか、に似ている。おれよりバカな兄ちゃんでも、おれより長生きだからいろんなことを知ってる。だから、先生との年を埋めるために、おれは勉強をする。

「塾も学校もクラス違っちゃったけど、もし学校で見かけたら伊織くんと仲良くしてやってね。あいつ友達少ないから」

顔怖いからね、と言って先生がくすっと笑う。おれはちょっと目をそらした。

「するけど。…でもあいつおれのことときらいだよ。睨んでくるし」
「え。そう？元々怖い顔だから…」
そのときドアが勢いよく開いた。
「はやくしろよ！腹減った…！……ん」
イオリだ…。知らなかったらしく、おれを見て気まずそうに目をそらした。
「進路相談中です～。先帰ってなさいよ。今日は遅くなるよ」
「…今日は、来るのか」
「行く。ごはん残しといて、お願い」
…聞いててい会話なのかわからない。一緒に住んでる？じゃないか。行くとか来るとか言ってるし。…いつも一緒に帰ってるのかな…。
わかった、と言って行こうとするイオリの背中に、先生が声をかけた。
「待って！片桐くんももう終わるから、待って。ね、片桐くん、伊織くんと一緒に帰ってくれる？」
おれの息をのむ音にかぶせてイオリが叫んだ。
「なんでだよ！」
「もうそろそろ暗くなるもん。こう見えてあんた小学生なんだからね、片桐くんも、一人で帰すわけにはいきません」
「大丈夫だよ、別に！」
「おれもいいよ、一人で帰れるって」
こいつと一緒に帰るなんてごめんだ。
「わかってないね～。なにかあって困るのはわたしなの。わたしが

怒られるの。いい子だからわたしをクビにしないでよ。ね」
おれもイオリも何も言い返せない。
先生は、やっぱりにこにこ笑っていた。

空には少しだけ赤みが残っていた。誰そ彼どきっていうやつ、その一歩手前くらい。その中を、イオリとおれは並んで歩いた。無言のまま。
住宅街を抜け、人気のある商店街が見えてきたとき、イオリが立ち止まった。一歩先でおれも止まる。振り返ろうとしたとき、イオリが

「お前あいつのこと好きだろ」

と言った。

おれは振り返るのをストップ、斜め前を見たまま、視線を動かせない。微妙に視界にイオリを捉えて言った。

「あいつって、誰」
ちょっと声震えたかも。かっこ悪っ。
「あいつだよ、有花だよ。好きなんだろ」

呼び捨てかよ！

やっぱりきらい、こいつ。仲良くやれるわけないよ、先生！
そう思う代わりに、イオリ怖いって気持ちがどこかに行ってしまった。こいつもしょせん小学五年生、先生に心配されてしまう子どもにかわりないんだ。でかいだけで。そう思うと意外とあっさり言

えた。

「好きだけど」

振り向いて、正面からイオリの目を見る。睨みつけたりなんて野蛮な真似は、おれはしない。イオリは背が高いから、ちょっとあごをそらせたヤンキーみたいな見方にはなっちゃったけど。

すると、イオリは大きく息を吸い込んで、そのまま吐き出した。…ため息つかれた？もしかして。

「信じらんねえ…あんな年増に」

「…はぁ？」

「十歳も離れてんの、わかってんの？」

「…わかってるけど」

お前もそうじゃん。

「なんかさー、胡散臭いと思ってたんだよお前。最初っから。恋愛に年の差なんてとか言っちゃうの？お前も」

「はぁ？…なに言ってんの、お前…」

イオリはもう一度ため息をついた。

「しょっちゅう現れるんだって、そういうの。あいつの周りに。最年長で７０代くらい。最年少はお前だ」

先生、すごい…としか言えない。ていうか最年少はお前だろ、正しくは。おれは四月生まれだからもう１１歳だ。

「本人はほっとんど気づいてないけどな。おれは生まれたときからそういうの見てんの。だから本人よりわかるの」

「ん？」

「あ？」

は？
生まれたとき、から？
「お前、…先生のなんなの？」
「いとこだけど」
ん？
「あっ？お前知らなかったのか？いとこだぞ。おれの母親の兄貴が有花の親父。いとこ」
「……あっ…そ」
はああ！？と言いたいところを我慢して息を吐き出す。なんだそれ！かっこ悪い！おれ！そして恥ずかしい！いとこに嫉妬してたのか！？いとこに知られた！
「とにかくやめとけよ。あいつは。すんごい言い寄られてんのに気付かねーし、誰にでも気があるような素振りするから。しょうもない女だよ」
うん、と話を聞きながら、やっぱりこいつ同い年に見えないと思い直した。でも悪い意味じゃない。こいつ、すごいやつだ。…いい意味でもないけど。
素直に話を聞き流して、とりあえず先生を諦めたふりをしておいた。話すうちにおれの家の前まで来ていた。こいつんちはとっくに通り過ぎてたらしい。意外と抜けてんのかな。それに、それだけしつこく、心配してくれてるってことなのかな。なんだかもう、イオリは口煩いおじさんみたいに思えてきた。

「お前大丈夫？家までついてこっか？」
「そんなの意味ないじゃん。大丈夫だって。じゃな」
「おう。…お前さあ」
だから、言ってみた。
行きかけてたイオリが振り返った。
「サッカーできる？」

…別に、仲良くするつもりなんてないけど。

「いや。おれそういうの苦手。空手やってっし、忙しいから」

じゃあな、と言ってイオリは行ってしまった。

誰が！こいつと仲良くなんかするもんか！！

駿は、すごくよろこんだ。でもこれでおれもサッカーできなくなっちゃった。そう言うと、じゃあ二人で朝練しようと言ってくれた。朝はサッカー、夜は勉強か。なんかいい。かっこいいかも。駿と友達で、ほんとによかったと思う。

進学コースは正直、楽しくなかった。それでもおれは必死で勉強していた。ここで成績落としたら、先生目当てに勉強がんばってたと思われると思ったから。そんなのださすぎる。

とりあえず今の目標は八弥真に合格すること。その次は駿とサッカー部に入って、国立を目指す。兄ちゃんみたいにバイトして、バイクも買おう。もっと、もっと、目指すものはいっぱいある。その先に、先生がいる。

待っててよね、先生。
――絶対、惚れさせてやるから。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3799q/

---

全方向彼女

2011年10月8日10時56分発行